
緑の目

ダーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の目

【Nコード】

N5451Y

【作者名】

ダーツ

【あらすじ】

この広い宇宙を守る、宇宙最強の軍隊、P・E軍。この軍隊には宇宙の所々からの依頼が集まる。そして今回、宇宙トップクラスの盗賊を退治して欲しいとある星の王女からの依頼が入った！

P・E軍中將の主人公「アミ」と、P・E軍総出で懸かる史上最大の作戦が今始まる！

星空（前書き）

こんにちは、ダーツです。

まだ下手くそだと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

星空

今日も、俺は上を見上げる。

特に何もする事がない。

どこかのちょっとした金持ちが座っているような椅子の背もたれに体重をかけ、じっと上を見上げる。

上にある小さい窓から見える何千もの数の星を見る。

俺はこの小さい窓からの景色が大好きだった。

見ていると、沢山の光たちが俺の方を向いて笑っているような感じがする。

そしてその笑顔と共に忌々しい記憶も甦ってくる。

何故だろう。

笑顔は人を愉快にさせる表情なのに。

笑顔だけ思い出せば楽だ。

……でもその笑顔があるから俺は苦しんできたんだ。

その笑顔があるから叫びが際立って聞こえてしまうんだ。

このように星を見ると嫌な気持ちになるのに、

何故上を見てしまうのだろうか。

やはりまだ根に残っているのか。

これまで聞いてきた悲痛な叫びがまだ耳に残っているからか。

では何故この景色が好きなんだ？

訳がわからない。

笑顔が好きだから？

でも嫌な事を沢山思い出してしまうなら、自分の好きなものをすぐに払い落とすはずだ。

俺はそんな人間だった。

では何故だろう。

考え続ける。目を瞑り、星達の光の残像を目蓋の裏で感じる。

何も思い浮かばない。

嫌な事を思い出してまでする事に何の意味があるのか。

わからないままに俺は上を見上げる。

この愛しくも、憎い星達を見ながら。

何を求めるのかも何がしたいのかもわからないまま。

俺は何かを求め続ける。

この授かった

澄んだ緑色の、真っ直ぐな目で。

多忙

「あ~~~~~」

俺は大きくあくびをする。

任務も全て完了し、後に残した物が無くなった俺は、いつものように艦長室に入り、ぼーっとしていた。

俺はアミ。ちゃんと本名はあるが、みんなからはアミと呼ばれている。

俺はP・E軍(Planet・Earth)の本部中将。そしてオリオン艦隊指令長官、そして艦隊の戦艦ビッグイーグルの艦長を務める。

俺が所属しているP・E軍は国ごとに分けられており、俺が所属しているのは日本。Planet・Earth・JAPAN すなわち、PEJと呼ばれることもある。

よって、アメリカならPEA、中国ならPECと呼ばれるわけだ。

俺は15分ほど艦長室でぼーっとしていた。

艦長室は、茶色をモチーフにしており、壁、机、椅子、絨毯など、

全て茶色がかった色をしていた。

中で休むには心を和ませる色だが、緊張している場面では緊張感を醸し出す、その場の雰囲気に合わせてられる一番の色だと俺は思っていた。

そしてこの艦長室には部屋の天井に小さい窓があった。

そこからは満天の星が顔を覗かせる。

そのの星を見ていると時間を忘れてしまいそんな感じに駆られる。

そして嫌な過去を思い出しそうになる。

そして俺は目を瞑る。

忘れかけていた時間を徐々に思い出していくのを感じる。

「アミ！」

俺はびくりとした。

一気に現実に戻される。

「ああ、なんだ奏か」

「またぼーっとしてたの？」

「うん、今日は疲れたから」

顔立ちが良く、スラッとした体型の少女が現れた。

彼女の名は水野 奏。

俺と同じ年の少女。俺と同じ時期にP・E軍に入った昔からの仲間である。水中部隊という隊に所属している。階級は大尉。ちなみに俺は15歳である。

「ところで何の用だ？」

奏は思い出したように顔をハッとさせると用件を言い出した。

「うん、なんかまた新しく任務が入ってきたって」

「え？ また任務か？ 俺はもう今日5つやってきたんだぞ？」

「なんかどっかの調査に行つて欲しいって」

少しの間の沈黙の時間が流れる。

何故こんな疲れている時に……。

「はあ〜」

俺は深いため息をついた。

「ところで、どこなんだ？ その調査して欲しい場所は？」

「あ、なんか惑星スカーレットっていう所だって」

「ああ、あそこか…」

太陽よりも熱いといわれる有名な惑星。

今は日本時間で午後9時頃。今から太陽よりも熱いなんていわれる所に行くなんてやる気が出るはずがなかった。

だが仕方ない。

「あゝゝゝ、しゃーない、頑張るかあゝ！」

「うん、頑張つてね！」

もつと休みたかったが、任務が入ってしまった。疲れた体にムチを打って椅子から立ち上がった。

もつと別のヤツに任せてもいいだろうと心の奥で思いつつ、奏と共に艦長室を出た。

さあまた、忙しい任務が始まる。

疲れと待ち時間

俺は奏と一緒に外に出て、さっき教えてもらった集合場所に一人でのんびり歩いてゆく。

今日も星空が綺麗だった。

宇宙空間に滞在する船なので、風は吹いていないが、外に出ると少しは爽やかな気持ちになれた。
そして歩きながら兵士達に軽く挨拶。

兵士達も明るく挨拶。

元気だなあと思いながら兵士達の行動を歩きながら少し観察。

いつも通りの日。

俺は集合場所に着き、軽くため息をつくと首をポキポキと鳴らした。

周りを見回すと、誰も人がいなかった。

任務に行くメンバーはまだ来ていないようだ。

俺は人を待つのは別に嫌いじゃないが、今だけとても不愉快だった。
こんなに疲れている時に立ちながら人を待つのはやはり体に響いた。

体がきしむ。

だが、集合場所で待っている時にはビッググイグルの力強い姿が目に入り、疲れた俺を癒してくれた。

何度となく目になっているが、やはり見ていて飽きない。

目の前には白いボディ、数々の大砲、武器を磨いたり点検したりするPEJの兵士達、そして目の前で一際目立っているものが目に入る。

その一際目立っているものは、この戦艦ビッググイグルの主砲。これまでにこの主砲で幾つもの敵や障害物を蹴散らしてきた。

そしてこの戦艦ビッググイグルは宇宙最大・最強の戦艦と言われているらしい。

大きさはなんと本州ほどあり、そして主砲の大きさは長野県ほどあるという。

俺は初めてこれを聞いたときにはかなりビックツたが、『こんなすごいフネに乗っているのか！』ととても感動した。

そして今、艦長という仕事をもらい、務めていられる事を心から誇りに思っている。

昔の感動の余韻を味わっていると、ある一人の少年が現れた。

歳は11、12歳くらいだった。体型は痩せ型である。

「あ、アミさん、こんばんは」

俺の名を呼び、軽く挨拶。ちゃんとお辞儀をする。礼儀はなっているようだ。

「ああ、お前も今呼び出されたのか？」

かなりの疲れ顔で質問をする。

俺の顔を見た少年が少し笑った気がした。

だがそれに突っ込むのも面倒臭く、突っ込む元気もなかった。

そして少年は真顔で答える。

「いや、今じゃないですよ。前から話は聞いていました。そうですね、10日くらい前です。で、今日が任務の日です。」

俺はキョトンとした顔で聞きかえす。

「あれ？前から話あったの？」

その少年は困った顔で頭を少し掻いた。

俺は少しため息をついた。

そしてまた質問。

「え、じゃあ俺は誰に呼ばれたんだ？」

その少年は表情を少し変え、口を動かし始める。

「あ……、なんかまだまだ新米の俺達だけで行かせるのは心配だから……、誰か上の人を連れてこいって言われたんですけど……」

「それで俺か……」

一気に疲れがどつと出た。

どうやら俺はこいつとその他の他の任務のメンバーに呼ばれ、即席の責任者として同行するらしい。

なかなか面倒な事をしてくれたなと心の奥底で思いながら更に質問を進める。

「他にもっといいやつがいたんじゃないか？」

すると痩せ型の少年は申し訳なさそうに答える。

「いや……、思い当たる人があなたしかいなくて……」

少年はすいませんと頭を下げて俺に謝った。

「まあ、いいけど……」

俺は言葉を終わると、座り込んで下を向いてしまった。
それを見た少年はまた謝り始める。

大丈夫だよ、と言い、少年を落ちつかせると、また下を向く。

この体勢が一番楽だ。

「あ、ああ、アミさん、みんなが来る前に任務の説明をしておきま
すね。」

俺は下を向きながらも耳を傾ける。

「では、いいですか？」

今回の任務は、惑星スカーレットの調査です。依頼主はスペース・
キャリアの職員だそうです。」

「スペース・キャリア……」

スペース・キャリアとは、宇宙の所々を飛び回る宇宙の宅配便。
俺達P・Eもかなりお世話になっている。

「んで？その職員は何て言ってたんだ？」

俺は下を向きながら尋ねる。

「はい、なんか、15日前、いつものように配達をされていて、惑星

スカーレットの近くを通った時に、何か不思議なものを見たそうなんです。」

「……不思議なもの？」

「はい。なんか雲一つ無い惑星スカーレットで、雷のような電気が走っていたそうです。」

「……電気……」

俺は考える。

不思議だ。

惑星スカーレットといえば、太陽よりも熱い星。

雲なんて出来るはずが無いし、そんな所に軽く出入り出来るのは、

P・E軍か、その他の科学技術が進んだ星。そうすると、的はかなり絞られてしまう。

もつとも、入れたとしても、電気を流したり出来る機械が無い。すぐに使い物にならなくなってしまう。

では一体何が……

「最近P・E軍全体の中で惑星スカーレットに行っただってという記録はあるか？」

「いや、無いですよ。第一、的は少数に絞られているんです。それも本部から連絡が来てます」

それもそうだ。

P・Eだつてわかっているはず。これから任務に行くやつらに言わないはずが無い。

「……………あ！」

俺は忘れかけていた重要な事を思い出した。

「そういえば、他のやつらはどうした？」

少年はギクツとした表情を見せ、俺の方を向く。

「い、いや、その……………」

その少年は黙ってしまった。

みんな任務の日を忘れてたとか言い出すのだろうか。

「あ？どうしてだ？」

俺は物凄い目つきで少年を見る。

しばらくの沈黙の後、少年は重い口を開いた。

「あ、……………あの……………、み、みんな…任務を忘れてて、……………ここに来る途中、連絡したらすぐに行くって言つて……………」

案の定、みんな揃つて任務を忘れていたようだ。

こんなに疲れている時に人を待たせ、その上任務を忘れたときた。不愉快極まり無い事だった。だが忘れてしまったものはしょうがない。

「んで？そいつらは今から来るのか？」

「……は、はい………すみません………」

少年は俺に向かって三度目の謝罪をする。

それに今回は頭を深々と下げて。

「……まあ、いいや！」

「……え？」

少年は俺の意外な言葉に驚いたようだった。

「任務忘れる事なんて、俺もしょっちゅうあったからな。……でも俺だから良かったけど、他の口うるさいやつだったら大変だったぜ？お前も少し遅れたからな」

少年は顔を上げ、安堵の表情を見せた。

「何だ？そんなに安心したのか？」

あまりにも少年の表情が大きく変わったため、こちらも驚いてしまった。

「はい！だって、

この前の任務の時にも遅れてしまって、その時はすごかったんです

もん」

かなり明るい声だった。

この話を聞いて、こいつは遅刻が多い事がわかった。

「……何度も遅刻するのは良くねえな……」

「……はい……」

少年は弱々しく返事をする。とまた少し暗い顔をした。

そしてまた謝った。

「まあ、そんな暗い顔すんなよ。これから遅れなきゃいい」

俺は少し優しい声で注意を促した。

すると少年はまた明るい表情を見せ、

「はい！」

と良い返事をした。

それから5分後、任務のメンバーがようやく集合した。

許そうかなと思ったが、先ほどの体の痛みと待たされていた苛立ち

が残っていたため、頭にきて少しきつく注意した。

少し言い過ぎたかなと思いつつ、小型の宇宙船に乗る。

目指すは、地獄の星、惑星スカーレット。

どんな任務になるのか。

疲れながらも、これから何が起こるのか、考え、心を躍らせながら出発した。

任務の前

戦艦ビッグイーグルから離れ、ようやく宇宙空間に出た俺達は、一時の休息を得た。船の窓からは無数の星が顔を覗かせている。

「さて、」

俺は静まっている船内の空気を破るように口を開いた。船内にいる全ての人間が俺の方を向く。そして全員が話を聞く体勢に入ったのを見計らってまた俺は話を始めた。

「さつきは結構きつく言い過ぎた。悪かった。」

俺は軽く謝ると全員は少し頭を下げた。

そしてまた話に戻る。

「俺、今気付いたんだけどさ、皆の名前もどんな人間なのかも良く知らないんだよ。だから、皆で軽く自己紹介をしないか？」

おどおどとした言葉が終わり、また静けさが戻った。

そしてこの張り詰めた空気の中で何かを話すのはかなり勇気がある事だというのを改めて知った。

「じゃあ、アミさん、

俺から……」

最初に口を開いたのは俺と初めに会話を交わしていた少年だった。

「ん……？君はさっきの子だね。よし、じゃあ始めて」

そう言うと、その少年に向かって視線が一点に集まる。そしてその少年は自己紹介を始めた。

「えー、名前は原田懸太はらだけんたです。陸軍に所属しています。とりあえずよろしく」

かなり軽い自己紹介だったのは気になったが、そこは突っ込まないようにした。

そしてこの懸太という少年が自己紹介を終えたところである一つの事が浮かんだ。

「あのさ、」

「はい？」

「年齢も言った方がいいんじゃないか？それと階級も。それで強さとかも分かるから」

階級なども、かなり重要な事。

それはその人間の強さなどを計るために知っておいた方が良さ思つての提案だった。

「はあ、分かりました」

そしてその後の話を聞くと彼の階級は兵長で、年齢は13歳ということがわかった。

そして更に自己紹介を進める。

次は、左の見るからに軍人らしくない体つきで顔立ちの整った女の子が自己紹介を始めた。

「こっ…古泉 遥香と申します！あっ…あの、アミさんと任務に行けるなんてとても光栄ですっ！よっ、よろしくお願いします！」

この子は真面目だなあと思いつつ、所々の突っ込み所を見つけ、この遥香という子の自己紹介を聞いてとても面白かった。自己紹介の中で抜けている所を注意した時、この子はどんな反応をするのか楽しみだった。

「ねえ、君、」

「はっ、はい！」

自慢のように聞こえてしまうかもしれないが、俺という大物を目の前にして体がガチガチになっている子を見ると、とても微笑ましい。

それを見ている他の子たちもくすくす笑っていた。

「君は、どこに所属してるの？まだ聞いてないよ」

「あっ…、すみません！水中部隊です」

水中部隊…ということ結構強いのか？そんな感じはしないな…。

そんな事を考えていると、また俺は気付いた。

今度は年齢を言うのを忘れている…それに階級も…。この子、かなりの天然だな…。

「君、」

「はっ、はい」

「年は？」

「あ……」

こんなやり取りが続き、少しの間、笑いに包まれた。俺も、周りにいるやつらもかなり和んだようだ。

しかし、和んだと言えどもそれは一瞬だけだった。一艦隊をまとめる指令長官が自分の近くにいたので。緊張の糸はずっと張り詰めたまま。それは仕方ない事だった。

そして遥香という子の年齢は12歳で、階級は一等兵ということがわかった。

次は、遥香の隣にいた体に自信がありそうな少年が自己紹介を始めた。

「名前は、ふじしげゆま藤重勇磨。年は14。階級は軍曹。陸軍に所属してます。よろしく」

かなりあっさりとした自己紹介だった。

この勇磨という少年、かなり鍛えているようだ。俺でも力で勝てる気がしない。

声も野太く、歩いて来たら道をとっさに空けてしまいそうな強烈なインパクトを放っていた。

「ああ、よろしくな」

俺は言葉を返すと、勇磨はどかと椅子に座った。

次は、その隣にいた気の強そうな女の子が自己紹介を始めた。

「私の名前は谷口結実！階級は上等兵で、年は12歳です！よろしくお願いします！」

とても澁刺とした声で自己紹介をした彼女は、見るからに体育会系の感じがした。

髪もショートカットで、とても動き易そうだ。

「はい、よろしくね」

俺は言葉を返すと、次に行くように手を動かした。

次は、コックピットに座っている少年が自己紹介を始めた。

「僕の名は大村義輝^{おおむらよしてる}。年は14。階級は曹長です。小型戦闘艇のパイロットをやっています。よろしくね」

かなり落ち着いた感じで、おまけに女子達にはかなりモテるであろうルックスも兼ね備えている。

男性陣の中ではまともな少年だった。

自己紹介を聞いている遥香と結実は早速顔が赤くなっている。

そしてこの少年を最後に自己紹介が終わった。

各々はまた別れ、自分たちの趣味や仕事をしている。

先程の自己紹介を最後に、会話が途切れてしまった。

俺はこの白けた空気があまり好きでは無かった。

しかし、こんな事もあるうかと俺もすっかり準備をしていた。俺はポケットに手を入れ、メンバーに呼び掛けた。

「おい、みんな」

船にいる全員がこちらを向く。

「みんな、トランプの『大富豪』わかるか？」

メンバー全員が顔を合わせる。

「え、ええ、そりゃもちろん知ってますけど…」

メンバーを代表して懸太が答える。いきなりの変わった質問に戸惑っているようだ。

「じゃあさ、今から皆でやろうよ！」

メンバー全員が「はあ？」という顔をする。

当たり前といえば当たり前だが、任務の前にトランプで遊ぶなどかなりおかしい。

しかし、今の俺にとって、この窮屈な空気の中で任務場所まで待つ事はとても無理だった。

「じゃあ、僕、やりたいな」

まず俺に付き合ってくれる意志を見せてくれたのは義輝だった。

「えっ、じゃああたしも！」

イケメンに引つ張られて来たのは結実だった。

その光景を見て、こいつは単純なヤツだな、と心の中で思った。まあいい、参加者が増えるのは良い事だ。

「じゃあ、俺も入らしてくれ、アミさん」

強烈なインパクトを放つ男、勇磨も参加してくれるようだ。

「え、ええ？じ、じゃあ、私も…」

次に、遥香が入ってきた。やはり、このいつもと違う雰囲気戸惑っているようだった。まあ仕方ない。普通ならあり得ない事なのだから。

そしてもう一人、この雰囲気に対応出来ない人間がいた。

「おい、懸太、やらないのか？」

懸太だ。見たところ、こいつがこの連中の中で一番真面目そうだった。

こんな事、軍人として普通ではない。彼には許せない事なのだろう。

「アミさん、こんな事、任務前なのに良いんですか？」

呆れたような目で懸太はこちらを見た。こいつは真面目なんだな。

「良くなきゃ、こんな事しないよ」

俺は笑顔で言った。

一人でも欠けてはならない。全員でやってこそ意味があるのだ。

懸太は一瞬考え込んだが、しばらくして顔を上げた。

「仕方ない、やります」

懸太が言葉を終えた時、みんなの心配そうな顔が一気に笑顔になった。

そうそう、この顔。

そして懸太が入り、義輝がトランプを配り始めた。

さあ、これから少しだけ騒げる時間。

俺にとって、トランプを持って任務前にやるこの時間が、任務の中で最も大好きな時だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451y/>

緑の目

2011年12月15日21時54分発行